

閲覧ニュース

20号

1978. 7.

☆ 前期試験に備えて

1) 開館時間について

平 日；9時から6時まで

土曜日；9時から1時まで

※但し、7/1(土)、7/8(土)は、3時まで開館。

2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期になると、一部の図書に利用が集中します。このため、予約の多いものに限り、オーバーナイト貸出、三日貸出等の措置をとります。

3) 複写について(平常どおりです)

午前中受付 — 昼 12時渡し

午 後受付 — 午後 4時渡し

4時以降受付は翌日渡しとなります。なお、図書館内の資料以外は複写致しません。

☆ 利用方法の一部変更

1) 貸出期間の延長

皆様へお渡ししてあります『図書館のしおり』P 9 には、返却期限の翌日より起算してとなっておりますが、返却日から一週間の延長と訂正します。なお、延滞図書については延滞日数分、短くなりますのでご注意ください。

2) 図書の予約について

前記『図書館のしおり』P 10 の予約の項には、カウンターに一週間保管となっておりますが、他の利用者への支障を考慮して3日間の保管と訂正します。

夏休み中のお知らせ

夏休み中の開館、貸出等につきましては以下のとおりですのでお知らせします。

1) 夏期長期貸出

・貸出期間 7/17(月)～9/18(月)

・貸出冊数 1人5冊

2) 夏休み中の開館時間

・平日 9時から5時(但し8月中は10時から3時)

・土曜 9時から1時

なお、8/14(月)～8/19(土)は、閉館となります。

＜小原文庫＞コーナーが

設置されました

閲覧ニュース第19号で紹介しましたように前玉川大学学長、故小原国芳氏からの寄贈図書計205冊を＜小原文庫＞と名付け、教養図書館の一隅に別置することになりました。

＜小原文庫＞設置の経緯につきましては、前号の閲覧ニュースに長木学長からのお言葉をいただいておりますので省略させていただきます。また、寄贈図書目録も合わせて掲載しておりますので、もう一度、ご覧になってみて下さい。

閲覧、貸出手続きは一般図書と同様です。

皆様のご利用を待っています。

読書を考える

立 崎 栄 一 (体育)

私は、あまり本を読むほうではないせいか、本当に心に残るもの、感動や感銘の強烈なものに出合わなかったような気がする。特に、小説などは、他人の書いた虚構にふりまわされまいと、一定の距離をおいて読んでいたようで、あまり影響力をもたなかったのかも知れない。従って、どちらかというところ、ものの考え方や価値観あるいは人の心を説いたものなどを選んで、自己の考え方を少しずつ修正しながら、人間的に成熟させる希いで読んでいたように思われる。

読書には、「眼で読む」「心で読む」「頭で読む」という三つの読み方があるものと私は考えている。(もちろん、いずれも脳の働きを必要とするわけではあるが…)

読書はしたけれども、記憶や刹那の快楽以外に何も残らない、つまりは活字を眼が読んでただけで、結果的には、頭も心も動かされなかったということがある。又、心からその書いてあるものに共鳴し、ところをうばわれてしまうような場合は、心で読んだことになる。多くの知識や情報を自分のものとして吸収し、自己

の思想や人格に影響を与えるような読書は、頭で読んでいることになる。

しかし、同じ本でも、その人の理性、知性、感受性などの度合によって、うけとめ方や読解力が違ってくるので、読む人と、その時期によって、頭や心で読むべき本を眼でしか読んでいなかったということも非常に多い。

我々には、人間らしく生きる権利と責任があり、人間社会に蓄積された文化遺産を学びとることも必要であるが、文化内容の伝達、享受そのものよりも、むしろ、これらのことをとおして、科学的思考力や創造的知性やゆたかな感性を培うことがより重要である。

人間性を無視した物質中心の科学文明と情報社会は、詭弁と打算に長けた皮相的知識人間を作りつつあるが、これらの断片的な知識や情報を、個々人のレベルで、統合的に判断、思考し、新しい人間的価値観や人間のところを育てるために読書すべきであろう。

真に頭や心で読む本に出会いたいものである。

一 冊 の 本

伊 藤 幸 子 (英語)

高校二年になった頃であつたらうか、父が「これから本代として月々五百円上げよう。」と言ってくれた。今でこそ英語のテキスト一冊買うにも足りないが、戦後わずかに数年を経たばかりの当時にあっては、五百円と言えば高校生に書籍代としてそれほど少ない額でもなかったから、私は何だか大人の仲間入りをさせて貰ったような気がして大いに嬉しかった。当時我が

家は疎開先の四日市にまだ残っていたのであるが、空襲によって灰燼に帰したこの街は、表通りこそいち早く復興して賑わっていたけれども中心を少し外れれば荒涼とした焼野原がいくらかも見られた。そんな戦後の街を、私はその五百円を懐に、知識人のタマゴよろしく本屋の店先をあさって歩いていたが、そんなある日、とある街角に、白木造りの(多分ペンキが間に合わ

なかったのでしょう) 堀立て小屋みたいな四角い小さな本の店が忽然と出現して私を喜ばせた。店の名を白楊書房と言い、真新しい棚にさわやかな新刊書がずらりと並んで、首都のあたりでとみに活発さを加えてきていた戦後の知的活動の息吹きをこの関西の小都市に伝えていた。私は胸をわくわくさせながら外国文学の新しい翻訳などを買い求めたが、その中に大山定一訳によるリルケの「マルテの手記」があった。私はその頃このドイツ有数の詩人についてほとんど何の知識も持っていなかった。たまたま当時よく読まれた桑原武夫の「文学入門」に、必読書の一冊として上げてあったのを覚えていたのである。色彩に乏しい焼跡の街にあって、濃藍と赤と白とのしょう酒な表紙は実に新鮮であった。それを手にしてそこに書かれた「マルテの手記」と言う字を読んだ時、私は自分でも気付かず探し求めていたある秘宝にめぐり合ったような、天啓にも似た驚きと興奮とを味わった。この出会いは忘れぬ想い出であるが、これほど胸を踊らせて買ったにも拘らず、この本の内容は当時の私にはとうてい理解できるものではなかった。文学的成長の人一倍遅かった私がこの書を本当に読むことができたのは、不覚にも三十の声を聞いてからであった。その時には、

このマルテと言う貧しい青年の手記の中に詩人のあり方のすべてがあること、そしてこの高貴な魂が選ぴとった抜きさしならぬ生き方こそ自分の倣うべき態度であることを、深い共感と感動のうちにしかと肝に銘じたものであった。

それ以来「マルテの手記」はリルケの詩や手紙と共に、私の聖書とも言うべき導きと慰めの書となった。長い苦しい模索の時期にもリルケは常に私の支えであったし、ようやくその低迷から脱して自分なりに一つの光を見出したと思った時、ノートを開いてまず書きつけたのは、いかなる時にも私に力を与え、導きの星となってくれたこの詩人への感謝の言葉であった。

リルケは晩年、陽光眩しいスイス、ヴァレー州シェールの近くに、ミュゾットの館と言う中世の古い城館を見つけそこにこもり、「ドウィノの悲歌」や「オルフォイスによせるソネット」など、不朽の作品を産みだした。夏が来て、日の光が悦ばしい約束を語るかのような輝きを帯びる時などふと夢みることがある。いつの日か、ヨーロッパのとある街の街外れ、あるいは風光清しい山間の小村に私のミュゾットを見つけることを。四日市の焼跡に始まったリルケとのつき合いが私をそこまで連れて行ってくれることを、私は願っているのである。

新着コーナーの新着図書

(1977.1~6月分)

＜岩波新書＞

- 「万葉の女流歌人」寺田透著 No.928
 「インドとイギリス」吉岡昭彦著 No.934
 「第三、韓国からの通信—1975.7~1977.8—」T・K生〔著〕「世界」編集部編 No.黄版27
 「食品を見わける」磯部晶策著 No.黄版28
 「イギリスと日本—その教育と経済—」森嶋通夫著 No.黄版29

- 「中世の知識人—アベラールからエラスムスへ—」J. ルゴフ著 No.黄版30
 「祭りの声—あるアメリカ移民の足跡—」新藤兼人著 No.黄版31
 「モーセ」浅野順一著 No.黄版32
 「ボワソナード—日本近代法の父—」G. E. ボワソナード著 No.黄版33

「ユーロコミュニズム—もう一つの共産主義か」

A. クリエジェル著 No. 黄版 34

「火山の話」中村一明著 No. 黄版 35

「認識とパタン」渡辺慧著 No. 黄版 36

「戒厳令」大江志乃夫著 No. 黄版 37

「スターリン主義を語る」

G. ボッファ、G. マルチネ共著 No. 黄版 38

「ことばの色彩」川本茂雄著 No. 黄版 40

「環境政策を考える」華山謙著 No. 黄版 41

「インフルエンザ—人類最後の大疫病—」

W. I. B. ビヴァリッジ著 No. 黄版 42

「数の大系 下」弥永昌吉著 No. 黄版 43

「茂吉秀歌 上・下巻」佐藤佐太郎著

No. 黄版 44・45

<中公新書>

「続・数理パズル」中村義作等著 No. 460

「人口を考える」村松稔著 No. 485

「生活のある学校—遊び・手仕事・子どもたち—」若狭蔵之助著 No. 486

「博徒と自由民権—名古屋事件始末記—」

長谷川昇著 No. 487

「教育問答」なだいなだ著 No. 488

「わが映画の青春—日本映画史の一側面—」

衣笠貞之助著 No. 489

「植物と哲学」山下正男著 No. 490

「帝国大学の誕生—国際比較の中での東大—」

中山茂著 No. 491

「中国人として育った私—解放後のハルビンで—」西条正著 No. 492

「創造的破壊—アメリカの自動車産業にみる—」

三輪晴治著 No. 493

「日本語と辞書」田村俊雄著 No. 494

「ロンドン—ほんの百年前の物語—」

小池滋著 No. 495

「漢字百話」白川静著 No. 500

「ひとり旅の知恵」高坂知英著 No. 501

「日本人の内と外」司馬遼太郎著 No. 502

<講談社現代新書>

「解放の世紀—現代のアジア—」

伊藤秀一著（新書東洋史 11） No. 461

「日本人—<殻なし卵>の自我像」

森常治著 No. 483

「詩のたのしさ」嶋岡晨著 No. 484

「続考える技術・書く技術」

板坂元著 No. 485

「味と文化」河野友美著 No. 486

「岩倉使節団—明治維新のなかの米欧—」

田中彰著 No. 487

「日本語のリズム—四拍子文化論—」

別宮貞徳著 No. 488

「ム—大陸の謎」金子史朗著 No. 489

「明暦の大火」黒木喬著 No. 491

「気球の歴史」篠田皎著 No. 492

「万葉集の風土」桜井満著 No. 493

「現代科学をどうとらえるか」

坂本賢三著 No. 494

「漢字—その特質と漢字文明の将来—」

鈴木修次著 No. 497

「日本の伝統工芸」北条明直著 No. 498

「土地の経済学」田中啓一著 No. 499

「タテ社会の力学」中根千枝著 No. 500

「ニーチェとの対話—ツアトラトストラ私

評—」西尾幹二著 No. 501

「万葉びとの一生」池田弥三郎著 No. 502

「生きることと愛すること」

W. エヴァレット著 No. 503

「日本語の表情」板坂元著 No. 505

閲覧 ニュース 20号 1978. 7. 6 発行

北里大学教養図書館

発行責任者 綱 島 窈